

あうる

Treasure every meeting as it's chance
to happen is only once in a life time.

豊平川の夜明け

豊平川流域を最初に踏査した和人は、今から二六〇年前の宝暦三年（一七五三）、流域の材木事業のために足を踏み入れた大阪の材木商・飛騨屋久兵衛三代目であつたといわれている。

それからおよそ五五年後の文化四年（一八〇七）、幕府の勘定奉行・近藤重蔵が札幌から豊平川を遡り蛇田へ出たという。さらに安政五年（一八五八）には、松浦武四郎が近藤重蔵とは逆のコースで踏査している。

当時蝦夷地は松前藩が統治していたが、安政二年（一八五五）、ロシアの脅威を懸念した幕府は箱館に奉行所を設けて直接統治を行い、その配下の石狩役所が札幌付近一帯の行政を担当した。

それに伴い、銭函から豊平、千歳を経て勇払に至る札幌越新道が開通した安政四年（一八五七）には、石狩役所が豊平川に渡船場と通行屋を設けたという。

剣客の渡し守

この渡船場の渡し守を命じられ和人最初の定住者となったのが、信州生まれの浪人、志村鉄一であった。

鉄一は当時剣客としてその名を知られ、かつて同じ道場で修業した吉良左馬之助とともに、武者修行の旅を続けていたが、石狩役所調役・荒井金助に勧められて、今の豊平橋の約一二〇メートル下流の東岸に渡し守として住むことになった。

渡し守を引き受けた鉄一は、荒井から給与と家具・食糧を支給され、さらに旅行者一〇人分の夜具や食器などの貸与も受け、通行屋を兼ねることになった。鉄一この時すでに齢五〇を過ぎていたと伝えられる。

その頃の豊平川は、本流と分流があったため、荒井は石狩役所の足軽、亀井丑太郎に使われていた農夫、吉田茂八を西岸の渡し守として、今の南四条東四丁目付近に住まわせることにした。

北海道
歴史秘話
14

志村鉄一

維新の流れに消えた豊平川の渡し守

札幌最初の和人定住者として豊平川の渡し守を務めた志村鉄一。札幌の開祖であり顕彰碑も建立されているが、彼の晩年は不遇であった。

茂八は、シカやクマなどの猟をしていた鉄砲撃ちの名手であった。

安政四年から明治二年（一八六九）にかけての二年間は、志村家の三人と吉田家の四人を併せた、二戸七人が札幌の和人の定住人口であったという。川を隔てた両家が時には語り合つこともあったであろうが、その孤独感はいかばかりであったろう。

それでも鉄一の所には時々旅人が泊まり、また、箱館戦争の脱走兵が小樽方面へ逃れる途中、一泊したこともあった。中には宿代を踏み倒そうと脅迫し、逆に剣の使い手である鉄一に木刀で打ちめされ、謝罪させられた者もいたそうだった。

ちのめされ、謝罪させられた者もいたそうだった。

奇跡の生還

安政五年、ロシア船が樺太に来航してそのまま住み着く気配があるとの知らせが幕府に入った。荒井が調査の命令を受け、士分七人、雇人二〇人連れて樺太へ調査に出向いた。その一行の中に鉄一の姿があった。

だが、厳しい寒さにもかかわらず貧弱な防寒装備。一行を襲った自然の猛

威は、二八人のうち二三人を凍死させるという、悲劇を引き起こした。しかし、鉄一は死ななかった。奇跡の生還を遂げた五人のうちの一人として、樺太から再び豊平川に戻ってきた。

変革の中、悲劇が始まる

鉄一が樺太から奇跡の生還を遂げた安政五年に「安政の大獄」が始まり、幕末の動乱へと時代は激しく動く。その後明治維新を迎え、同二年には官軍と戦った榎本武揚らが降伏し、箱館戦争も終結した。

蝦夷地は北海道と改められ、明治新

政府の統治に移行するなかで、鉄一の悲劇が始まった。

明治二年一月、札幌本譜の経営が始まると、開拓使は石狩役所から貸与されていた鉄一の住居と物品を残らず召し上げ、吉田茂八を後任とした。

開拓使の冷遇により、職と住居を一挙に失ってしまった鉄一は、定山渓で温泉浴場を経営していた僧・美泉定山を頼って、そこに一時寄寓しなければならぬ羽目に陥ってしまった。

職も無く無聊をかこつ鉄一。酒に浸る日も多くなった。さらに、貧しさのせいなのか、妻との別離も迎えなければならなかった。

妻子のその後の消息を知るすべもなく、丸くなった背に苦悩と孤独の影を漂わせての一人暮らしであったろう。失意の中、鉄一は老け込んでいった。

鉄一の死

鉄一がいつどのように死んだのか、はっきりした記録が無く謎となっている。明治二年頃に亡くなったとも言われるが、それも推測の域を出ない。

一説には、札幌で三日間にわたる猛吹雪があった時に、雪が吹き込んだ自分の小屋で、愛刀を抱いたまま眠るが如く息絶えていたという。樺太調査で凍死を免れ奇跡の生還を遂げた鉄一なのに、何とも皮肉な終焉である。

豊平川の渡船場を一筋に守り続けた鉄一の晩年は、あまりにも不遇であった。



金子耕式さん

平等の誤り

本の冒頭に記していますが、今の世の中は基準を失った時代だと思っんです。以前日本には家庭の中に父親には絶対服従という基準がありました。ところが戦争が終わり、民主的な考えが入ってきて「絶対的な価値・基準というものはない。自分が正しいと思つことが真理で、自分がやりたいことは全て追求する権利がある。自分がそう思つたらそれでいいんだ」という社会になりました。「全ての人は平等」という考え方は素晴らしいのですが、その考え方が子育ての中に入っていくと、「子供と大人も平等」という考え方に段々

なっていくんですね。

「親はあまり上から押し付けたり、叱つたりせず、自由に放任したほうがいい。そのほうが個性的にその子の能力を引き伸ばせる」。そういう立場の子育てが今主流です。親と子が対等になり、先生や周りの大人にも子供達は対等の口を利くようになった。

子供達が幸せに生きるためには、親が人生の大先輩として導いてあげなければいけません。親は今までのいろいろな人生模様を経験し、生きる術を身に付けている。一方子供達は、まだ数年しか生きていません。その子供達に、「自由でノビノビと生きて欲しいから、お父さん、お母さんは何にも言わない。

好きな時に好きなことをやりなさい」。こんな子育てをしたなら、それは単なる無責任。親は尊敬の対象ではなく、単に子供達のやりたいことに協力してくれる、そんな存在になってしまった。

囲炉裏

私は古い民家が好きなので白川郷の合掌造りに真冬、行ったことがあります。囲炉裏を囲み、宿のご主人からいろんな話を聞き、非常に貴重な時間が持てました。その時思ったんです。昔はここに大家族が住んでいて、囲炉裏の火を囲む一家団欒の毎日があった。ここに住んでいた人達には決して子育ての悩みなどなかったはずだ。この

人達の生活の知恵も価値観も倫理観も自然に次の子供達にバトンタッチされていった。

ところが今の時代は物質的に豊になり、子供達は小部屋を与えられ、ゲームもあれば携帯もある。すべてのものが揃っているから、お母さんが「ご飯ですよ」と呼んでも「あとで電子レンジでチンするから」となってしまう。

少なくとも私が小さい頃は、お父さんの「いただきます」という言葉で食事が始まり、一日のことを話し合った。一緒にドラマを見たりしているうちに、親子に心の絆が生まれ、知恵の伝授があった。一家団欒からいろんなことへ発展していった。しかし、最近では、家族が食事を共にする機会がドンなくなり、NHKの調査によつて、三分の一の子供達が朝ご飯を一人で食べて学校に行くという実態が分かり、そこから「孤食」という言葉が生まれた。今の家庭家族がいかに一緒に集う場所を失っているか。それが今の世の中の混乱に繋がっていると思います。

子育てに重要なこと

今の時代、子育てに重要なことが三つあると今回出版した本に書きました。まずは「愛情」。愛情無くして子供を正しく導くことはできません。

次に「時間と感動を共有する」ということ。苦楽を共にする時間と感動を共有しなかったら、心の世界で繋がらない。

三番目は、子供が小さい頃から、親

は「尊敬され、信頼されるリーダーシップ」を持つこと。例えば皆さんに「初めて海に潜ってダイビングする時どうしますか？」と尋ねると「ダイビングスクールに入るでしょうね。だって危険でしょう」と答えてくれます。その通りです。「じゃあ、子供達が泳ぐう」としているこの人生の海はどうなんですか？ 何も教えずに泳いでいいんですか？ 大人は人生を色々経験しているのだから、ダイビングスクールのインストラクターの立場と同じ。それなのに、いきなり子供達をボートに乗せて沖まで連れて行き「君達の装備はこれだよ。それで勝手に潜りたいように潜りなさい」では無責任でしょう。

私は親たちに「子供達の基準は親であるあなた方になるようにしなさい。子供達を自由にさせ、勝手にやりたいようにやらせたら、未熟なんだからとんでもないことになりますよ」と言っています。自信を持って子供達のリーダーとなり、いいコーチになって欲しい。そのためには親が子供をよく知ること。多く係わり、心の繋がりが持てるよつ時間と感動の共有をすることが大切です。

金子 耕式 かね こうし
一九五六年、横浜生まれ。慶応大学文学部卒。一九七九年、FEBE東京支社にアナウンサーとして入社。サンフランシスコ支社に転勤。日本向け短波放送番組を担当。一九八七年、帰国後(株)エイブル語学研究社を設立、同代表取締役となる。一九九四年、本業の傍らファミリー・フォーカス・ジャパンの設立に協力。現在副代表。二男一女の父親。

Dilettante 悠々人語録

子育て、家族・家庭問題についての講演会やHBCラジオ「ファミリー・トーク」・STVラジオ「家族に贈るとおきの話」などで活躍する金子耕式さん。3月には新著『いま子育てに必要なこと』も出版しています。子育てには何が大切なのか？ 金子さんの悠々人語録です。

あうる古今東西

文化譚

着る、着ない？ 禁止された衣服



クールビズ解禁について、融通の利かない議論が交わされていた日本だが、今やなんでもありという風潮の個人の衣服において、ある種の宗教的衣装が話題になっている。それもファッション先進国フランスにおいてである。

事の発端は昨年四月の、ベルギー下院内務委員会からはじまる。「顔や全身を隠す衣装は、本人の身元特定を不可能にする。」ということからイスラム教徒の女性が着る、あの全身を覆う衣装を禁止する法案を可決した。

いつまでもなくイスラム過激派のテロによる九・一一から今日に至る情勢に対する反応である。対象となる衣装はブルカ、ニカブという。ブルカは顔の部分が網状のもの、ニカブは目の部分だけがあいている、顔を覆つベールで、服とは別になっているものである。

ベルギーでは主に治安上の問題として提起されたものの、波紋は隣国フランスにも波及した。アフガンの

旧タリバン政権が着用を強制したこともあって、フランスのサルコジ大統領が二年前「ブルカは女性隷属の象徴でフランスでは歓迎されない」との演説をしたことから、これらの衣装は女性の尊厳を損なうとして、フランス議会で『ブルカ禁止法案』が成立した。フランスにはこの規制の対象となる着用女性は一千九百人ほどいるという。

ところで、これらの女性の中にはすべてが夫や親戚の男性に強制されたわけではなく、宗教的な強制でもない主張する女性もいる。大学で法律を学んだ、あるモロッコ系移民の家の女性には「この法律は個人の自由を侵害する」と主張。彼女は特に熱心なイスラム教徒というわけではなく、学生時代は普通にスカートを着用していたという。イスラム預言者ムハンマドの妻たちの生き方を読んで魅了されたのだという。彼女は、自分の娘たちに着せるつもりはないと言い、もし罰金など課せられ

たら欧州人権裁判所に提訴するつもりだという。中東のイスラム教指導者の間でも賛否は分かれる。カイロにあるスンニ派最高権威機関『アズハル』のバイユミ師は「これらの衣装は、イスラム教の宗教的義務にはなっていない」との見解を示し、フランスの法案に理解をみせた。

一方これに対しヨルダンの穏健派政党『イスラム行動戦線』のマンスール事務局長は「欧州では女性のヌードでさえ許容されているのに、女性としてきわめて慎み深い服装がなぜ禁止されるのか。人間の尊厳と自由に対する侮辱だ」と反論する。

着用女性の中には「ファッションとして素敵だから」という理由もあったという。いずれにしろヨーロッパにおいて、自由な意思の象徴と考えるか、女性差別の象徴と考えるかは、それぞれの生き方の証明、まさに個人の自由であるべきだろうと思うのだが。

BOOK INFORMATION

一冊 紹介 受書

『浅田真央 Book for Charity』

吉田 順・著

学研教育出版

定価一、〇〇〇円

(税込)

二〇一一年

六月二十三日
発行

伝説のスケーター・伊藤みどりの引退から二〇年。浅田真央は、トリプルアクセルの系譜を継ぎ、天才ジャンパー・みどりが持ち得なかった、しなやかな表現力と外国人にも劣らぬ完璧なスタイルで、デビュー以来常に世界のトップをひた走っている。

繰り返される不可解なルール改正や偏向採点で今やフィギュアの試合はまるで茶番劇。大国の欧米ですら人気は凋落しているが、不条理な結果注とは、出版ビジネスの例としてもズン。バンクーバーでの涙の銀メダルは結果ではない。至高を目指す彼女のプロセスに過ぎないのだ。

果に憤慨しつつも、日本のファンは熱心に競技を追う。ここ数年の主要な国際大会で、表彰台には必ず日本人がいる。今は、国内大会で勝つ方が難しいと言われる程選手層が厚い、日本フィギュアの黄金時代なのだ。

突出しているのはやはり真央。驚異的な身体能力と精神力、繊細さと強靱さを併せもつ稀有な才能は、未だその限界を知らない。無垢な天才少女が、苦悩を知る大人のアスリートへ変貌を遂げつつあるこの数シーメンタリーを歓迎するのだ。(K)

北海道の 同人誌

椽



ある文字ではないのかもしれませんが、由緒があります。「晋書王珣伝」という中国の古い書物によるもので、晋という国に住む王珣というひとが椽（たるきのこと）のごとく大きな筆を授けられた夢をみてからは見事な文が書けるようになったという故事からとったものです。

（一）最近の実状をいえば、執筆者は寺田教室の常連である数人が中心となっておりですが、小誌は創作を目指す人ならば誰もが気軽に参加できる文芸誌としての門戸を開いております。入会の要件は、作品を投稿していただくだけです。当

「椽」は、もともと、道新文化センター・寺田文恵先生の「はじめての創作」教室（平成九年十月開講）が編集発行していた作品集の名称です。その第一集は平成十年六月に零号として発行しております。寺田先生が十四年九月に教室の講師を辞された後、生徒たちが「椽の会」として自主的に集まり、「椽」があらたなスタート台に立つこととなったわけです。同人誌「椽」第五号を十五年四月に発行して以降、年一回の発行を継続し、本年は第十三号となりました。

小誌は創作を主体に編集していますが、随筆・エッセイあるいは文芸評論などを含めて募集を行っています。あえて傾向をいうならば、純文学志向。アドバイザーは岩見沢在住の作家寺田文恵先生。初々しい作品、大歓迎です。

作品は電子原稿での投稿（メール送信またはFD送付）を受け付けておりますので、ご利用ください。宛先は、小誌のホームページ [http://www14.ocn.ne.jp/~tennet/] に記載しております。

「椽」これはなんと読むのでしょうか、という質問を若い人から受けます。パソコンに「てん」と入力してもそんな漢字がなかなか出てこないという苦情もときどき聞きます。現在ではあまりなじみの

作品（全文）も公表していますので、併せてご覧をいただければ幸いに存じます。（椽 渡邊護）

扉

文芸サークル互楽



後感などを話し合う。その結集として、年一回の同人誌「扉」を発行する。今年で十六号になる。人員はメンバーの入れ替わりもあったが十五名前後で推移している。

会員の年齢、住所、経歴はまちまちだが、決してエリート集団ではない。なかには賞をもらった者もいるがほとんどは無名の者である。これらは互いに切磋琢磨して少しでも向上出来ることを願っている。互楽という気儘な自由集団であっても、一つ一つの扉を開けることに意義もあることが誌名の由来である。

基本的には「扉」掲載は投稿者全員としている。添削は本人の同意のもとに行われ、あくまでも本人の主意を尊重する。私たちは路傍の石ころ集団と自認している。どんな石ころにもそれぞれの個性があり、それが感性だと思ふ。それを互いに磨き合うことに「互楽」のもう一つの意味合いがあると考えている。

俵箭氏はいまは退かれています、その本分は変わらず受け継がれてゆくものと思っている。同人誌の継続はかなり困難なことがある。会員数の伸び悩み、運営費のやりくり、当然会員同士の意見の相違から軋轢も生じる。これらを乗り切って、なんとか頑張っていきたい。

（扉 小林 隆）

■編集部から

札幌市中央図書館から「電子図書館実証実験」のための協力要請が来た。出版物の提供依頼である。図書館に協力する事は別に、出版社としては独自の展開を考えたいものだ。7月の「東京国際ブックフェア」では、「電子書籍元年」と言われた昨年と比べると、より具体的な動きが現れてきた印象がある。単純に前進とは言えないが、問題点を浮き彫りにするということも大切だ。地方ならではの取り組みを模索したい。（Y）

●発行・編集／中西出版あうる編集部
〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1-34
TEL (011) 785-0737 FAX (011) 781-7516
URL : http://nakanishi-shuppan.co.jp/m
E-mail : owl@nakanishi-shuppan.co.jp

●発行責任者／林下英二
●発行日／2011年8月10日 ●デザイン／上野修一



ホームページへ
アクセス！

